

令和 5 年 5 月 16 日現在

機関番号：32704

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18H00716

研究課題名(和文) 日本軍「慰安婦」制度の国際比較 帝国主義諸国の軍隊と性売買・性暴力

研究課題名(英文) Comparative study on the Japanese Military "Comfort women" System: The Military and Sex trade/ Sexual Violence under the Imperialism

研究代表者

林 博史 (HAYASHI, Hirofumi)

関東学院大学・経済学部・教授

研究者番号：80180975

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本軍「慰安婦」制度について、軍隊と性売買・性暴力との関連の視点から、19世紀から20世紀の帝国主義諸国との国際比較をおこなうことによって、その世界史的な位置と歴史的な意味を明らかにすることを目的として実施した。調査研究対象として日本・沖縄を含めて、米国や英国など欧米諸国と韓国を取り上げた。米国、英国において国立公文書館などで史料調査収集をおこなうと同時に各国の関係研究や史料を収集し、また沖縄を含めた日本国内においても調査をおこなった。それらの史料文献を分析することを通じて日本軍「慰安婦」制度の世界史的なかでの位置を明確にすることが一定程度できたと思われる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

19世紀から20世紀にかけて規制主義をベースに軍用性的施設が展開し、第2次大戦では日独伊枢軸国が大規模に設置したこと、残った一部も20世紀末ごろまでには消滅したことを明らかにした。その過程において特に英国を中心とする廃止運動が大きな影響力を持ち、その後の婦女売買禁止などの国際的な取組みにつながったことを示した。日本は世界史的な流れに逆行して規制主義を極端なまでに非人間化させた軍「慰安婦」制度を大規模に展開したという世界史的な位置が明確になった。このことは学術的にも大きな研究成果であると同時に、軍隊による性暴力・性売買をなくそうと努力している国際社会にも重要な知見を提供するものであろう。

研究成果の概要(英文)：This study is intended to clarify the world historical position and the historical significance of the Japanese military "comfort woman" system from the viewpoint of the relations between the armed forces and sex trade/sexual violence by making international comparison with the imperialism countries from the 19th to the 20th century. To achieve such purpose, we have dealt with the Western countries and Korea including the United States and the U.K, in addition to Japan and Okinawa.

We have collected related studies and documents of each country. At the same time, we have conducted research at the National Archives in the United States and the U.K. and made investigations in Japan including Okinawa. As a result, we think that we were able to demonstrate the world historical position of the Japanese military "comfort woman" system to some extent through analyzing those works and documents.

研究分野：近現代史

キーワード：性暴力 性売買 ジェンダー 帝国主義 植民地主義

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

## 1. 研究開始当初の背景

日本軍が 1930 年代からの 1940 年代前半に組織的かつ大規模に展開した日本軍「慰安婦」制度は、はたして日本軍独自のものなのか、あるいはどの国の軍隊でも同じようなものはあったのか、という疑問は、1990 年代にこの問題が人権問題として国内外で大きな問題となってから継続して問われてきた。

第 1 にどの国にも同じようなものがあつたと主張する立場がある。そのなかでは二つに分かれる。一つは、ほかの国も同じようなことをしているのだから日本だけが批判される筋合いはないとする立場である。もう一つは、どの国の軍隊でも同じような非人道的、性差別的なことをおこなうものであり軍隊そのものに問題があるとする立場である。この考え方を全面的に否定するものではないが、両者ともに侵略した側とされた側、植民地化した側とされた側などの違いや歴史的な段階・状況の違いもすべて捨象されてしまう。この二つは両極端に位置するように見えるが、いつの時代のどの国の軍隊も同じようなものだという認識では意外に共通しているとも言える。

第 2 に日本軍「慰安婦」制度は日本独自のものであるという理解がある。1930 年代から 1940 年代という歴史的段階において、あれほど組織的かつ大規模に極端な女性の人権蹂躪を躊躇することもなく展開したという点では理解できるものがある。ただ近年はナチス・ドイツの例についての研究が進んできており、第二次世界大戦においては日本とドイツが際立っていることが共通の認識になりつつある。しかしドイツは別に置くとしても、日本独自のものという理解はそれでいいのだろうかという疑問は残る。

日本においては日本軍「慰安婦」制度の研究が 1990 年代より進展してきた。ドイツでも研究が始まり、国防軍や強制収容所での売春宿、ドイツ軍による性暴力の研究が進みつつある。韓国においても、朝鮮戦争時の韓国軍「慰安婦」や米軍「慰安婦」の研究が始まり、日本軍「慰安婦」問題と合わせて、国家による女性の人権侵害という普遍的な視点からの研究が進められてきている。フランスでもようやく研究書が刊行されるようになった。こうした状況の変化により、国際比較をできる条件が整いつつあつたと言える。

日本での研究を振り返ると、米軍の性対策については本共同研究の参加者らによって少しずつ研究が進み始めていたが、それ以外に流布しているものの多くはきちんとした史料調査と分析なく、断片的な情報によるものが多かった。ヨーロッパ各国の軍隊についてはほとんど研究がなく、さらに売春・性売買を公認する規制主義と軍の政策との関係、時間的空間的にも世界史的な視野でとらえた研究はまったくない状況だった。日本軍「慰安婦」制度を世界史的ななかで位置づけるためには日米比較だけでは不十分であり、欧州を含めて国際比較が必要であること、19-20 世紀における規制主義の形成展開衰退の過程をふまえて、軍隊と性売買の問題をとらえる必要があることも強く感じていた。

本共同研究の開始時点ではそのような研究状況だった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本軍「慰安婦」制度について、軍隊と性売買・性暴力との関連の視点から、19 世紀から 20 世紀の帝国主義諸国との国際比較をおこなうことによって、その

世界史的な位置づけとその歴史的な意味を明らかにすることである。

近代の規制主義は19世紀から20世紀に展開し衰退した政策であり、軍隊専用の売春宿を設置する方策はこの規制主義を基盤として展開したと言える。日本軍「慰安婦」制度は、世界的に規制主義への批判が高まり廃止へと動いている中で、それに逆行し、旧来の世界秩序（英米による秩序という意味だけでなく、人権や自由という価値観なども含まれる）を否定しようとする中で、大規模かつ女性の人権を蹂躪しながら展開したという点で、その歴史的な位置づけを確認することができると考えられる。この見通しが妥当かどうかは研究を進める中で実証すべき課題であった。日本軍「慰安婦」制度が日本独自のものであるとか、どの軍隊も同じだというような単純な議論ではなく、19-20世紀の世界史の中で日本軍「慰安婦」制度はどのように位置付けられるのか、それが本共同研究を始めた目的である。

### 3. 研究の方法

本研究では、英仏独など欧州諸国や韓国などを含めて、19-20世紀の世界史の中で日本軍「慰安婦」制度の位置を明らかにすることを目指した。さらに帝国主義本国と植民地・従属地域（植民地主義）、人種主義（民族差別も含む）、性差別、戦時・準戦時と平時、侵略と被侵略、人権意識（特に女性の人権）などの視点から分析をおこなうものである。従来の研究ではいずれかの視点を重視したものが多かったように見受けられるが、国際比較をおこなううえでも多面的な視点から総合的に見る必要がある。また諸国の政策の比較にとどまらず、それが展開した諸条件を解明することを目指した。

本研究の対象とする国は、日本のほかに、米国、英国、フランス、ドイツ、オランダなど欧米諸国と韓国である。それぞれの国における性売買に対する政策（規制主義、廃止主義、禁止主義など）の展開過程をふまえて、そのうえで、そうした政策と密接に関係しながらも相対的に独自の展開をしているように見られる軍隊の性売買政策を比較検討した。

日本に関しては、軍「慰安婦」にさせられた女性の中に、公娼制下の女性が少なくなかったことも踏まえて、公娼制の展開過程との関連を意識して日本国内での史料文献調査をおこなった。また国内でも歴史史料の公開が進んでおり、あらためて徹底した調査が必要であるとの認識から、日本の外交文書や自治体などで収集されている米軍史料、国立公文書館などに所蔵されている日本軍「慰安婦」制度や公娼制に関する史料を収集した。

米軍に関しては、米国の国立公文書館をはじめ各大統領図書館や議会図書館、ニューヨークやサンフランシスコなどの公立図書館の米政府・米軍史料・文献、英軍については、英国の国立公文書館、英国図書館、ロンドン大学LSE図書館（特にその中の女性図書館）などの英政府・英軍史料・文献、など海外での史料調査をおこなった。フランス軍については関連するフランス語研究文献の邦訳をおこない、韓国（韓国軍と在韓米軍）についても関連する韓国語文献・史料の邦訳をおこなった。その他の言語の国々の軍隊については、刊行されている英文の研究書・研究論文を中心に収集した。そこではアジアアフリカを植民地としそこに駐留していった欧米諸国の軍隊についても調査対象とした。

そうした調査をおこないながら、ドイツ、フランス、韓国をはじめ、各国の研究者とも提携をはかり、新型コロナの影響で当初の計画に比して不十分ではあったが、共同での調査や研究会をおこなって国際比較・分析を進めた。

売春対策と性病対策とを一体化させ、近代の国家売春規制制度が本格的に実施されるのは 19 世紀になってからである。本研究は以上のような調査により収集した史料の分析と各国での研究成果を学びながら、19 世紀初頭から 20 世紀にいたる帝国主義の歴史のなかで、英国、米国、フランス、オランダ、ドイツ、イタリアなどの帝国主義諸国、さらには米軍が駐留している韓国や沖縄・日本本土における軍隊の売春管理政策・方法について軍用性的施設という視点から比較分析し、それぞれの歴史的な位置と特徴を明らかにすること、そのことにより日本軍「慰安婦」制度の歴史的な位置と特徴を明らかにすることを意図して研究を進めた。

#### 4. 研究成果

2018-2019 年度は予定通りに海外・国内調査をおこない、フランスと韓国から研究者を招聘して、それぞれ研究会とシンポジウムを開催した。しかし 2020 年度より新型コロナウイルスの影響により海外調査をおこなうことができず、ようやく最終年度に海外調査をおこなうことができた。国内調査については出張ができない時期も長かったが、その間、フランス語と韓国語史料文献の邦訳をおこない、また各国事情についての研究書・研究論文の収集に努めた。調査に出かけることができず、海外の研究者との研究交流という点では十分にはおこなえなかったが、収集した史料文献を読み込んで分析する時間を確保することができた。最終年度には全体のまとめとなる研究会を、ほかの研究者の参加も得て開催し、代表者・分担者が研究報告をおこなった。

本研究で明らかにできたことを以下に整理する。

近代の国家売春規制制度は 19 世紀とともに始まった。国民国家が形成されていくなかで軍隊の性病問題が注目され、医学界が性病の検診と治療が可能であると考えようになったことが規制制度導入の要因となった。近代の規制制度は性病による兵力損失を防いで軍隊の効率性を維持するために導入され、さらに兵士を供給する「国民」に対象を広げられていった。ヨーロッパ諸国で始まった規制制度は、帝国主義の世界進出のなかで植民地化あるいは勢力圏化していったアフリカ、アジアなどの諸地域に導入されていった。その目的は、現地民衆の健康ではなく、帝国主義諸国の軍隊の効率性の維持だった。アルジェリアのフランス軍やインドの英軍などが、軍用性的施設を設置していった。規制主義が軍用性的施設を導入する根拠となる思想だった。

こうした政策の背景には、帝国主義／植民地主義、家父長制／女性差別、さらに「売春婦」と見なす女性たちを男性の性的欲求解消の道具として非人間化する思想などがあった。しかしそうした規制主義に対して、19 世紀後半より廃止運動が始まる。廃止主義の根拠としては、悪徳である売春を国家が公認することは許されないとする道徳主義があり、プロテスタントが廃止運動参加者の中心を占めた。さらに医学者たちのなかからも規制制度では性病を防ぐ効果がないという医学的科学的な議論も出されるようになった。英国の女性運動はそうした根拠に加えて女性の人権を前面に打ち出した。

英国の廃止運動の場合、プロテスタント、フェミニスト（主に中産階級の女性たち）、労働者階級も加わり、自由党を動かすことによって規制制度を撤廃させることに成功した。英国の廃止運動は、海外の植民地、特にインドにも関心を向け、19 世紀末にはインドでの英軍向けの軍用性的施設制度の廃止を実現した。

英国以外では、米国、オランダ、北欧諸国で規制廃止へと動く。一時的に廃止主義を採用したドイツのような例もある。他方で規制制度を維持するフランスや日本のような国もあった。ただ他方で、19世紀末より廃止運動のなかから、禁止／処罰主義の流れが生まれ強くなっていく。それが社会浄化運動であり、売春を悪徳と考える点では禁止主義と重なるが、禁止主義は売春婦を主要なターゲットとして攻撃の矛先を向けた。その禁止主義の代表的な例が米国だった。

規制主義と禁止主義は、一見対極にあると思われるが、売春婦とみなした女性の人権が無視される点では共通していた。禁止主義は売春を非難し売春婦を取り締まりながらも軍隊が駐留している海外では現地行政当局に規制をおこなわせる手法を利用して事実上、一定の売春規制をおこない兵士たちに利用させた。米軍によるその手法は日本や韓国などでも取られた。

規制主義について見ると、19世紀末から売春形態の多様化や、売春という枠ではとらえられない性行動の多様化が進み、規制された売春宿という形は衰退していく。また警察による強権が批判され、警察による取締りよりは公衆衛生を前面に出した新規制主義へと移っていく。しかし売春形態や性行動の多様化のなかで売春婦（と見なした女性）だけを管理する方法の限界が認識されるようになり、社会全体を管理する政策へと重点を移していく。男女を問わず性病予防教育をおこない、無料で秘密裡に診断治療を受けられる医療制度を整備していくようになる。同時に、売春に関わる周旋や売春から利益を得ること、人身売買や強制を違法化し取締る法制が導入されてくる。

また第1次世界大戦後は、国際連盟による婦女売買禁止への取組みが進み、規制主義は国際的な批判を浴びて縮小していくが、日本は1930年代の中国への侵略戦争のなかでその国際的な流れに逆行し、日本軍「慰安婦」制度を組織的かつ大規模に占領地のいたるところに設置していった。大戦末期には沖縄や日本本土にまでも設置し、そこに植民地や占領地、日本女性までも動員していった。ナチス・ドイツも大規模な軍用性的施設を設置しており、枢軸国であった日本とドイツが際立っていた。なおイタリアとフランスも軍用性的施設を設置した。

第2次世界大戦後は、1950年代までには規制制度が主要諸国で廃止されたこともあり、軍用性的施設と言えるものは、帝国主義諸国においてはフランス軍と駐韓米軍で継続したにとどまるだろう。それらはほぼ20世紀末まで存続し続けた。なお20世紀末から21世紀の今日においては、軍隊専属の性的施設というよりは、外見は女性の自由意思によるという形をとった性的搾取、それを支える人身取引が問題になっている。

本研究を通じて、以上のような世界史的な見通しを持つことができるようになった。もちろん今後の研究の進展のなかで追加・修正がなされていくであろうが、当初の本研究の目的は十分に達成でき、研究水準を大きく引き上げることができたと考えられる。

研究代表者は本研究の成果を著作として公刊し、学会報告もおこなって研究者や市民に成果を還元することをおこなっている。また分担者はいくつか論文として発表してきているが、さらに著作としてもまとめる準備を進めている。それらが刊行されれば、本研究のより幅広い成果が多くの研究者・市民に共有されることになるだろう。そういう点でも本研究は十分な成果をあげたと言えるだろうし、そのことはさらなる研究の発展に貢献すると考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 林博史	4. 巻 866
2. 論文標題 近代帝国主義諸国の軍用性的施設	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 52, 65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉見義明	4. 巻 44
2. 論文標題 日本軍慰安所と将校・兵士・軍属	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中央大学論集	6. 最初と最後の頁 1, 18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野沢あかね	4. 巻 83-1
2. 論文標題 日本軍『慰安婦』問題と性売買	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立教大学史学会『史苑』	6. 最初と最後の頁 1, 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永原陽子	4. 巻 892
2. 論文標題 二人の明治期日本人のアフリカ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 図書	6. 最初と最後の頁 14, 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉見義明	4. 巻 944
2. 論文標題 ラムザイヤー論文の何が問題か 日本軍「慰安婦」をめぐる“契約論”を検証する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 126, 135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉見義明	4. 巻 43
2. 論文標題 中国における日本軍慰安所の所在について 『支那在留邦人人名録』各年版の検討を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中央大学論集	6. 最初と最後の頁 65, 83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野沢あかね	4. 巻 102
2. 論文標題 日本軍「慰安婦」問題から何を学ぶか 買春批判の性教育へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊セクシュアリティ	6. 最初と最後の頁 86, 93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Onozawa Akane (Translated by Miho Matsugu)	4. 巻 20-6
2. 論文標題 Problem of J.Mark Ramseyer's "Contracting for Sex in the Pacific War" : On Japan's Licensed Prostitution Contract System	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Asia-Pacific Journal : Japan Focus	6. 最初と最後の頁 Article ID 5689
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 兼子歩	4. 巻 14
2. 論文標題 アメリカ史研究者がみたジェンダーの日本史：国立歴史民俗博物館 企画展示「性差(ジェンダー)の日本史」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同時代史研究	6. 最初と最後の頁 87, 92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉見義明	4. 巻 42号
2. 論文標題 山口県における近代公娼制の展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中央大学論集	6. 最初と最後の頁 11, 24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉見義明	4. 巻 243号
2. 論文標題 書評 金富子・金栄『植民地遊廓』第 部を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史科学	6. 最初と最後の頁 32, 34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 兼子歩	4. 巻 48巻13号
2. 論文標題 アメリカの警察暴力と人種・階級・男性性の矛盾	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 75, 81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 兼子歩	4. 巻 42
2. 論文標題 インターセクショナリティの時代? : 「女性のワシントン大行進」にみるジェンダーと人種	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アメリカ史研究	6. 最初と最後の頁 130, 143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 兼子歩	4. 巻 84
2. 論文標題 オリンピック、ジェンダー、セクシュアリティ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 20, 35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉見義明	4. 巻 41
2. 論文標題 ある元日本軍「慰安婦」の回想(8) 吉元玉さんからの聴き取り	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中央大学論集	6. 最初と最後の頁 71, 87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林博史	4. 巻 980
2. 論文標題 軍事史料調査の経験からアーカイブズと史料調査について考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 25, 31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉見義明、梁澄子	4. 巻 40
2. 論文標題 在日の元日本軍「慰安婦」の回想 宋神道さんの証言	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中央大学論集	6. 最初と最後の頁 85, 107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 兼子歩	4. 巻 908
2. 論文標題 トランプの時代の新しい女性運動	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 176, 183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 兼子歩	4. 巻 917
2. 論文標題 アメリカ政治を変える黒人女性たち	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 98, 106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 林博史
2. 発表標題 近代帝国主義諸国の軍用性的施設
3. 学会等名 歴史科学協議会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 兼子歩
2. 発表標題 冷戦下のアメリカをジェンダー/セクシュアリティから考える
3. 学会等名 歴史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉見義明
2. 発表標題 ラムザイヤー氏「慰安婦論」のどこが問題か
3. 学会等名 Fight for Justice主催、歴史学研究会・日本史研究会・歴史科学協議会・歴史教育者協議会共催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野沢あかね
2. 発表標題 ラムザイヤー氏「娼妓契約論」のどこが問題か
3. 学会等名 Fight for Justice主催、歴史学研究会・日本史研究会・歴史科学協議会・歴史教育者協議会共催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野沢あかね
2. 発表標題 「慰安婦」サバイバーの語りを日本ではどう聴くか 女性史研究から
3. 学会等名 VAWW RAC
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 兼子歩
2. 発表標題 アメリカ研究・ジェンダー史
3. 学会等名 明治大学ジェンダーセンター
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野沢あかね
2. 発表標題 元Aサインバーホステスの経験を聞く 米軍統治下コザ市（沖縄）におけるライフ・ヒストリーの方法
3. 学会等名 韓国オーラル・ヒストリー学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野沢あかね
2. 発表標題 「慰安婦」被害はどう聞き取られてきたか 性売買研究の立場から
3. 学会等名 「戦争と女性への暴力」リサーチ・アクションセンター
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野沢あかね
2. 発表標題 地方遊廓の実態 栃木県烏山町福二楼の一次史料に見る娼妓たち
3. 学会等名 遊廓社会研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 兼子歩
2. 発表標題 トランプの時代におけるジェンダーと人種の交錯
3. 学会等名 日本アメリカ学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 兼子歩
2. 発表標題 ひとりのアメリカ研究者からみた『男らしさの歴史』
3. 学会等名 ジェンダー史学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 小野沢あかね解説 シンバク・ジニョン著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ころから	5. 総ページ数 254
3. 書名 性売員のブラックホール	

1. 著者名 永原陽子 共編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 298
3. 書名 岩波講座世界歴史第20巻：二つの世界大戦と帝国主義 I	

1. 著者名 永原陽子 共編著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 312
3. 書名 岩波講座世界歴史第20巻：二つの世界大戦と帝国主義 II	

1. 著者名 永原陽子編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 304
3. 書名 岩波講座世界歴史第18巻：アフリカ諸地域	

1. 著者名 林博史	4. 発行年 2021年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 472
3. 書名 帝国主義国の軍隊と性 売春規制と軍用性的施設	

1. 著者名 兼子歩 編者 岩本裕子・西崎緑	4. 発行年 2021年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 271
3. 書名 自由と解放を求める人びと：アメリカ黒人の闘争と多面的な連携の歴史	

1. 著者名 金富子・小野沢あかね編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 284
3. 書名 性暴力被害を聴く 「慰安婦」から現代の性搾取へ	

1. 著者名 吉見義明	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 264
3. 書名 買春する帝国 - 日本軍「慰安婦」問題の基底	

1. 著者名 日本平和学会編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 326
3. 書名 平和をめぐる14の論点 平和研究が問い続けること	

1. 著者名 柴田勝二編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 182
3. 書名 世界のなかの子規・漱石と近代日本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小野沢 あかね (ONOZAWA Akane) (00276700)	立教大学・文学部・教授  (32686)	
研究分担者	吉見 義明 (YOSHIMI Yoshiaki) (40102884)	中央大学・企業研究所・客員研究員  (32641)	
研究分担者	兼子 歩 (KANEKO Ayumu) (80464692)	明治大学・政治経済学部・専任准教授  (32682)	
研究分担者	永原 陽子 (NAGAHARA Yoko) (90172551)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員  (12603)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	渡辺 美奈 (WATANABE Mina)		
研究協力者	木村 嘉代子 (KIMURA Kayoko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------